

# ジェイムズ・ミルにおける中庸な財産と陶冶

立 川 潔

## 目 次

### I 問題の所在

### II 貴族的統治構造の下での過度の財産 (enormous fortunes) と腐敗

### III 蓄積の自然法則の下での中庸な財産 (moderate fortunes) と陶冶

### IV 中間階級と労働階級

#### IV-1 労働階級の人口制限と中間階級

#### IV-2 模範原理と中間階級による労働階級の指導

### V まとめにかえて——ジョン・ステュアート・ミルの停止状態論の想源——

## I 問題の所在

「生産のための生産」を指向することが産業資本の利益とほぼ一致していたとされる疾風怒濤の時代において、もし哲学的急進派の運動を産業資本主義の全面展開を意図した運動と理解するならば、以下で検討するジェイムズ・ミルの展望した経済社会は、大きな戸惑いを与えざるをえないものとなろう。

なるほど彼は、地主貴族の階級利益を維持するための「不自然な不平等」を撤廃し「蓄積の自然法則」を十全に貫徹させることをその運動の主要な目的の一つとしていた (Mill [19] p. 285)。このような運動目標は、従来一般に地主貴族と産業資本の対抗図式にあてはめられて、後者の論理の代弁と解釈されてきた。しかし、この解釈においては、「蓄積の自然法則」の貫徹を求めたミルの意図それ自体は必ずしも十分に検討されてきたとはいえないように思われる。

彼の諸著作を検討すれば、彼が「生産のための生産」を欲していたので

も、富に対する無限の欲望を実現するシステムを語ろうとしていたのでもないことは明らかである。従来解釈からすれば奇異に感じられるかもしれないが、彼は「蓄積の自然法則」の貫徹によってむしろ人間の物質的な欲求が「合理的」ものに限定され、富の追求が過度なものから穏やかなものへと変わりうると判断していたのである。欲求の主要な対象が富から知性と徳性へと転換した社会を形成すること、それが「蓄積の自然法則」の貫徹を望んだミルの意図であった。彼の果たした歴史的役割と彼の意図とは峻別されなければならないのである。

本稿では、ジェイムズ・ミルの意図を明らかにするために、Ⅱにおいて、彼が無限の富の追求と知的道徳的な腐敗の元凶を「過度の財産 (enormous fortunes)」とそれを維持する貴族的統治構造に求めていたことを示し、Ⅲにおいて、「蓄積の自然法則」の展開からは「過度の財産」は生成しないとのミルの認識を確認したい。ミルは、余暇を知的道徳的陶冶に捧げる多数の「中庸な財産 (moderate fortunes)」所有者と彼等を模倣する高賃金の労働階級で構成された社会を展望していたが、そのためには「蓄積の自然法則」の展開だけではなく、労働者の人口制限および中間階級と労働階級との親密な (intimate) 関係をその条件としていたことをⅣで明らかにする。そこでは、労働者の人口制限がたんに彼等の高賃金を保障するだけではなく、中間階級を維持する、したがって文明を維持するための絶対不可欠な条件としても考えられていたことを示し、さらにミルが「工業地域 (manufacturing district)」に批判的な眼を向けていた理由を明らかにしたい。それらの検討をふまえて、Ⅴにおいて、ジェイムズ・ミルの将来社会像が、ジョン・ステュアート・ミルの停止状態論の想源になっていることを確認する<sup>1)</sup>。「古い学派の政治経済学」が停止状態を忌み嫌っていたとす

---

1) ジョン・ステュアート・ミルの停止状態論の想源がジェイムズ・ミルにあることはすでにウィンチによって指摘されている。ウィンチは、他者の尊敬をかちえようとする富の追求が実りのないものとなる「合理的な千年王国」を実現しようとした点でジョン・ステュアート・ミルの停止状態論の想源が

れば、少なくとも彼の父ジェイムズ・ミルはけっしてそのような学派には属していなかったのである。

## II 貴族的統治構造下での過度の財産 (enormous fortunes) と腐敗

ジェイムズ・ミルは、大多数の人々の生が他者への共感を喪失したなりふりかまわない利己的な富の追求に向けられてしまっている現実を直視していた。

「大抵の人々の生がなんと完全に富と野心の追求に奪われてしまっていることか。家族愛、友人愛、祖国愛、人類愛が、富や権力への愛と対立した場合、なんと多くの人々においてそれらが無力となることか。」(Mill [16] II, p. 215)

「富に対する欲求は無限」であり、富は「人間の精神に抗し難い影響力を与えている」(Mill [11] p. 44, 訳108-09頁)。しかし、彼はこのような無限の欲求を人間本性から帰結する不変な欲求とは見做さなかった。人間は、「苦痛を避け快楽を獲得しようとする欲求によって支配されている存在」(Mill [10] p. 712) であるが、それだからこそかえって現実の利己的な快楽の追求から「趣味の快楽、知性の行使の快楽、徳性の快楽」の「陶冶」へと欲求の方向を変えることができる存在でもあったのである(Mill [16] II p. 366)<sup>2)</sup>。

ジェイムズ・ミルにとって人間の性格は観念の連鎖によって決定される

---

ジェイムズにあるとしている (Winch [34] p. 195)。本稿ではより多岐にわたってその想源がジェイムズにあることを示そうと思う。

- 2) 人間を快苦原理に従う存在と捉えたことは必ずしも人間を利己主義者と捉えたことを意味しない。彼は快苦原理に従わない人間を想定する社会改革をユートピアとして厳しく退けているが (Mill [10] p. 712)、それは快苦原理に従う本性を利用することでむしろ人間の欲求を利他的な方向に変えろという彼の確信からの批判なのである。

のであり (Mill [11] p. 12, 訳37頁; p. 31, 訳79頁), 教育とはこの観念の連鎖に影響を及ぼすあらゆる諸事情を包括するものである (Mill [11] p. 19, 訳53頁)。彼にとって, 人間を「知的道徳的に粗野な状態」に貶めるのも「可能性としての完成という最高の状態」にまで高めるのも教育の結果なのである。それゆえ, 「教育が果たせないものはほとんどない」のである (Mill [11] p. 18, 訳51-52頁; pp. 19-20, 訳54-55頁)。

このように人間の性格形成に教育が絶大な影響を及ぼすと考えるミルにとって, 利己的な富の追求は, 劣悪な統治が人々の観念の連鎖に及ぼす悪しき政治教育の賜物であった。すなわち, 富を権力の唯一の源泉としている貴族的統治構造こそ, 富と高い社会的評価との強力な連想をつくり出し, 人々をなりふりかまわぬ富の追求に駆り立てている元凶なのである。

ミルによれば, 「過度の富 (overgrown wealth) の所有者から構成された社会」においては, 名誉 (distinction) は富からしか得られないのであって「高貴な精神的資質」は「名誉の原因」にはなりえない (Mill [19] pp. 291-92)。何故ならば, 彼等は「知的徳性やその他の徳性を陶冶するための動機」を何らもってないばかりではなく, 自分達がもちえないそれらの徳性に対する尊敬が社会に生じるのを妨げることを自らの利益としているからである。さらに富による名誉は高価と気品を同義語にすることによって真に「気品ある生に対する趣味 (taste for the elegancies of life)」が一般に普及するのを妨げ, 「趣味の腐敗をもたらす」(Mill [19] p. 286)。「趣味の快楽, 知性の行使の快楽, 徳性の快楽」はここでは「陶冶」されることはないのである。

しかも, 「過度の富」の所有者である貴族の知的道徳的腐敗は社会全体に蔓延せざるをえない。

「指導的な階級, すなわち権力と富において極めて際だった階級が, 社会の残りの人々に支配的風潮を与えるのである。彼等を模倣することが野心の根拠であり, 彼等に似ることが名誉 (honourable distinction) の源泉なので

ある。彼等の見解は、尊重される見解であり、彼等の作法が気品ある作法であり、彼等の行為の規則が洗練された道徳なのである。」(Mill [15] p.255)

したがって、ミルにとって議会改革の目的は、なによりもこのような財産と名誉との強力な連想を断ち切ることで、知的道徳的な腐敗の原因を除去しようとするものであった(立川 [38])。いうまでもなく議会改革は、土地分割を阻む相続法など「分配の自然法則に加えられた不自然な抑制の結果である不平等」に守られた地主貴族の経済的基盤を掘り崩すことをその主要な目的の一つとしていた。しかし、それは「生産のための生産」の立場からというよりも、むしろ目的となってしまう富を知性と徳性の陶冶という非経済的な目的を実現するための手段に引き下ろす立場からの運動目標であったのである。ミルにとって、「不自然な不平等」の嘆かわしい所産は、「過度の財産をもつ少数者を育成すること」であり、そしてこの「過度の財産」が生み出す知的道徳的腐敗であったのである(Mill [19] pp. 285-86)。

「この源泉に負う不平等〔不自然な不平等〕は、あらゆる点で有害である。すなわち、自然な種類の不平等から生じる有益な結果を抑制し、その他の点でも政治体の中の病癩として作用するのである。」(Mill [19] p. 285)

上の引用中、「自然な種類の不平等」とは「蓄積の自然法則の結果」を意味するのであるが、このことは、「過度の財産」という「悪徳と愚行」の源泉が「蓄積の自然法則」からは生じないとのミルの認識を示唆している。この点を次に検討しよう。

### Ⅲ 蓄積の自然法則の下での中庸な財産 (moderate fortunes) と陶冶

「あまりに抽象的な性格で、平易でもなくあまり有益でもない」(McCul-

loch [6] p. 18) と論評された『政治経済学の初歩』(*Elements of Political Economy*)の中で、人口と賃金との関係を論じた第2章第2節は、「政治経済の「科学」に限定した「教科書」を意図したものに社会-政治的議論を導入」(Winch [34] pp.193-94)したものである。『初歩』だけではなく彼の他の諸著作を視野に入れるならば、抽象的な理論展開の中に、哲学的急進派としての彼の運動を規定した将来社会についてのヴィジョンを読みとることができる。

彼は、そこで、様々な分配様式における蓄積の動機を検討し、いかなる階級構造の社会においても「中庸な財産 (moderate effects) 以上のものは、蓄積の動機からはほとんど生じえないことを証明」(Mill [13] pp.55-56, 訳48頁)しようと試みている。

ミルによれば、現実のあらゆる社会は、少数の大財産所有者と「必需品だけに切り詰められている」大多数の人々で構成されている状態（[社会状態Ⅰ]）か、あるいは大多数の人民が「生存と享楽に必要なもの」を充分に供給されている状態（[社会状態Ⅱ]）かのどちらかに近似している (Mill [13] p. 51, 訳44-45頁)。

[社会状態Ⅰ]においては、大多数の人々は貯蓄する余裕はない。さらに、「大財産の所有は一般に直接的享楽の欲求を刺激する」。したがって、このような階級構成の社会状態では、蓄積の誘因はほとんど存在しえないと断定される (Mill [13] p. 52, 訳45頁)。

他方、[社会状態Ⅱ]においては、人民の大多数が快適で (comfortable) さらに楽しい (pleasurable) 生活を営むのに必要な「全ての実質的な享楽手段を所有している」。ミルによれば、それ以外の財は「空想にもとづく (fancy)」財にすぎない。このような財に対する対応は、節制の資質を獲得しているか否かで異なるが、ともに貯蓄動機が優位をしめえない点では同じである。不節制な労働者は貯蓄しえないし、「諸々の快樂の正しい評価を下すことができるほど理性が強力である」労働者も、「合理的な欲求 (ra-

tional desires) をすべて満たした後に……獲得できる快樂は、我々が想定している環境においては彼等がそれらを獲得するために断念しなければならぬ快樂と等しくないということに気づかざるをえない」。こうして、「我々の本性の高貴な原理と下等な原理とともに、そのような環境においては、蓄積に対立している」と断定される (Mill [13] pp. 52-53, 訳45-46頁)。

ここで、留意すべきことは、欲求の対象を「合理的な」ものと「空想にもとづく」ものに分けた上で後者に対して欲求を抱かない理性的な人間を想定していることである<sup>3)</sup>。このことは、「想定している環境においては」モノ自体の効用からではなく高い社会的評価を求めることから無限化する富の追求が存在しないことを意味している。しかし、この点はすぐ後で検討することにして、ミルの論旨を辿っていこう。

さて、ミルによれば、「年生産物のうち、労働階級の分け前が控除された後に残された部分は、大部分が、少数の極めて富裕な人々に分配されるか ([社会状態Ⅱ-1] 一引用者)、中庸な財産 (moderate fortunes) を所有する多数の人々に分配される ([社会状態Ⅱ-2] 一引用者)」 (Mill [13] p. 53, 訳46頁)。すでに述べたように極めて富裕な人々は一般に直接的享樂の欲求を刺激されるので貯蓄性向は極めて低いとされる。したがって、[社会状態Ⅱ-1] では強力な蓄積の動機は存在しない。

他方、[社会状態Ⅱ-2] においては、中庸な財産所有者は、物質的な享受の点では「最大の財産が賦与しうるあらゆるもの」を獲得している。しか

---

3) そもそも財を「合理的な」ものと「空想にもとづく」ものとにきれいに分けることができるのか疑問であるが、富を誇示するための財への欲求を批判したミルは少なくとも快適で楽しい生活を営むのに必要な財に対する欲求を決して否定していないことは指摘しておきたい。ジョン・ステュアート・ミルは、「モノはその固有の有用性 (their intrinsic usefulness) に従って評価すること」がジェイムズの道徳的教えの一つであり、「何に耽るにせよ中庸のところまで止める (stopping short at the point of moderation)」という節制 (temperance) が、「ギリシア哲学者達の場合と同様に父の場合にも教育のための指針のほとんど中心であった」 (Mill, S. [26] p. 49, 訳50頁) と指摘している。

も、高い社会的評価をえようとする富獲得の動機は、「今の事例で想定される社会状態」においては、大きなものとはなりえないと断定されている (Mill [13] p. 54, 訳47頁)。何故であろうか。

「最初の階級、すなわち、たんに独立と物質的享楽ばかりではなく、趣味と気品 (taste and elegance) といったあらゆる目的をかなえることができる財産をもち、同時に社会の指導的な部分 (the governing portion of society) を構成し、さらに社会の意見や娯楽に一般的傾向を与えている人々は、より多量の富の眩さによってその想像力を眩惑させられるような人々の境遇にはないのである。第二の階級に属する人々、すなわち労働階級は、富者の不機嫌が恐ろしく、富者の僅かな好意すら重要である場合には、畏縮し卑屈になるけれども、しかし、独立の感情を授け、その精神を陶冶する機会 (opportunity for the cultivation of their minds) が与えられる環境におかれるならば、彼等が富のしるし (signs of wealth) から影響をうけることはほとんどないのである。したがって、このような状態は、大きな富の所有が、他の人々の尊敬をかちえることができず、貯蓄のための強力な動機となりえない社会状態なのである。」 (Mill [13] pp. 54-55, 訳47頁)

留意しなければならないことは、このように富によって名誉をかちえようとする動機が強力になりえないという結論が導かれるには、中間階級が「社会の指導的な部分」で世論を形成する階級になっているという前提があるということである。このことは、貴族がもはや「指導的な階級」ではなく、したがって貴族的統治構造が存在しないことを意味している<sup>4)</sup>。換言すれば、ミルはここで「過度の財産」を温存する貴族的統治構造を捨

---

4) 中間階級は「社会の中で、もし代表の基盤がそこまで広げられることがあるとすれば世論を究極的に決定するであろう部分」(Mill [12] p.32, 訳181頁)と考えられているのであるから、ここでは議会改革によって中間階級に「代表の基盤」が広げられていることが想定されていることになる。ジェイムズに

象して、その場合には名誉心からの貯蓄動機は強力にはなりえないことを論証しているのである。

それゆえ、富によって名誉を勝ちえることのできないこのような社会において残された貯蓄の動機は、「子供の生活への備えに対する欲求」だけである。にもかかわらず、この欲求は「極めて一般的であることが期待されうるであろうし、それは一定の中庸な資本の増加 (moderate increase of capital) を保障する」がゆえに、植民地等の特殊事情を除けば、この社会状態が「蓄積にとって最も好都合な社会状態」(Mill [13] p. 55, 訳48頁)であるとミルは結論づける。

ところで、富を権力の唯一の源泉とする統治が存在しない社会では名誉は富によって勝ちえることができないとすれば、「相当ではあるが中庸な財産を所有する人々 (men of easy but moderate fortunes) と、良い給与をとっている労働者及び職人の集団」で構成されている社会では何によって名誉を勝ちえることができるのであろうか。ミルは、次のように名誉は知性と徳性によってしかかちえないと判断する。

「相当の所得は得ているが、しかし過度の所得はほとんど得ていない人々 (Men of independent, but few enormous incomes) が、一つの階級および一つの公衆を形成するに足るほど多数存在すれば、同胞の尊敬と愛情を勝ちえる資質によって彼等の中で名誉を求めざるをえない。これらの資質とは、知性の高い資質であり、徳性の実践であり、人に愛される性質、気品ある生活態度 (elegance of deportment in life) である。そのような境遇にある人々の社会的交際においては、その主要な野心は、そのような資質を持っ

---

おいては、教育が普及すれば人民は知性と徳性にしたがって代表を選出すると楽観的に想定されていたために、代議制度によって自ずと知性と徳性の反映した統治が実現されるはずであった。ジョン・ステュアート・ミルは1829年以降この楽観的な想定に対して懐疑を表明するようになるのであり、功利主義倫理学と政治学を再構築する必要性に迫られることになる。この点については立川 [37] 参照。

ていることを明示することであるにちがいない。」(Mill [19] pp. 290-91)

以上の検討から明らかなように、ミルは「蓄積の自然法則」が十全に作用すれば、知的道徳的腐敗の温床としての「過度の財産」を生み出すほど強力な貯蓄動機は存在しないと判断していた。その作用を妨げている貴族的統治構造こそ人為的に「過度の財産」を維持し、現実のなりふりかまわぬ利己的な富の追求に人々を駆り立てている元凶なのである。「蓄積の自然法則」から生み出されるのは「中庸な財産」であり、その所有者は過度の財産から生じる「あらゆる悪徳と愚行」から免れ、「自らの時間を自由にすることができ、肉体労働 (manual labour) の必要性から解放される」(Mill [13] p.64, 訳56頁)。しかも彼等が「一つの公衆を形成するに足るほど多数存在すれば」知的道徳的徳性が名誉の源泉となり彼等はそれらの徳性を陶冶するようになる。しかも「文明の被造物」である中間階級は「文明の恩恵が増大するにつれて、増大する」(Mill [7] p.417) と展望されていたのである<sup>5)</sup>。以上のことから明らかなようにミルが中間階級を称賛するのは産業資本家という性格ゆえではなく、むしろ高度な知的道徳的資質を陶冶する階級としてなのである。

したがって、ミルにおいては、「蓄積の自然法則」の貫徹は、富に対する無限な欲求を実現するシステムを形成することを意味するものではけっしてなかったのである。しかし、このことは政治経済学の伝統において特異な位置を占めていることを示すものではないように思われる。例えば、アダム・スミスは高い社会的評価を求めての富の追求を肯定したけれども、その肯定の背後には「貯蓄を促す原理は……一般に穏やかで冷静な (calm and dispassionate)」欲求との認識があった (Smith [30] p. 341, 訳(1)534頁)。ミ

---

5) 中間階級がますますその数と重要性を増し、彼等が世論を形成し、その世論にしたがって統治がおこなわれていくことへの確信と期待については、Mill [15] pp. 269-70 も参照のこと。

ルは、富と名誉との連想を切り離すことで、スミスが考えたように貯蓄の動機を穏やかなものにしようとしていたとも言えるであろう。

ともあれ、後に検討するような諸条件に助けられて、余暇を知性と徳性の陶冶に捧げる多数の中間階級と彼等を模倣しようとする労働階級で構成された理想的な社会が「蓄積の自然法則」の展開によって実現しうると考えられていたのである<sup>6)</sup>。

## Ⅳ 中間階級と労働階級

### Ⅳ-1 労働階級の人口制限と中間階級

ミルが理想とする経済社会の成立には、「蓄積の自然法則」の展開ばかりではなく、二つの不可欠な条件が存在する。一つは労働者の人口制限であり、他の一つは労働者が「精神を陶冶する機会が与えられる環境におかれる」ということである。後者はⅣ-2で検討することとして、ここでは労働者の人口制限がいかなる意義を与えられているのか検討しよう。

マルサスの人口法則と賃金基金説に立脚するミルにとって、労働者が少なくとも富者に従属せず「独立の感情」を抱きうる賃金を獲得するためには、彼等自身の人口制限が不可欠であった。さらに「生存と享楽に必要な

---

6) 留意したいことは、ミルは「不自然な不平等」は批判するのだが、「蓄積の自然法則の結果」である「財産の自然な不平等」は積極的に肯定しているということである。彼が、そのような不平等を肯定する一つの理由は、それが文明の物質的基礎を保障する財産制度の必然的な帰結だからである。全労働生産物に対する労働者の権利を主張する「ホジスキンの気の狂ったナンセンス」や財産権に対する尊敬を失わせる意見の流布は「ファン族やタタール人の抗しがたい殺到よりも一層劣悪に文明社会を破壊する」(Bain [2] p. 364)と考えられたのはこのためであった。

さらに、彼がより積極的に不平等を肯定するのは、そのような不平等であることで肉體労働から解放され「高度な知的才能」や「気品ある生を陶冶する」ために必要な自由時間を享受しうる人々を確保することができるからである (Mill [19] pp. 284-85)。

平等主義は文明社会の物質的基礎を保障する生産力を確保しえないばかりか、文明を生み出す主体を形成しえないものとして厳しく批判されたのである。

もの」を供給されていることが、後に述べるように、彼等が中間階級を模倣し知的道徳的な資質を身につけるための物質的な条件でもあるのだから、人口制限はそのための前提でもある。

しかし、労働者の人口制限の必要性は、労働者の物質的な生活条件の改善だけにあったのではない。ミルにとって、人口制限は、「我々の本性の偉大にして顕著な属性、すなわちその進歩性」(Mill [13] p. 63, 訳55頁)を保障する中間階級を確保するための、したがって文明それ自体を維持かつ前進させるための絶対不可欠な条件と位置づけられているのである。

人口制限による多数の中間階級の維持というミルの意図は、急速な資本蓄積に対するその消極的な見解に端的に現れている。ミルは、立法府が節約の習慣を生み出したり所得税を課してそれを資本に転化したりすることによって「資本の増加をその自然の歩調以上に速める」(Mill [13] p. 57, 訳50頁)ことが可能なことを認めていた。しかし、彼はこのような「強制された資本蓄積 (forced accumulation of capital)」が劣等地耕作を進展させ利潤率を低下させることで中間階級の維持に支障をきたすことを恐れたのである。

「この目的〔多数の中間階級の維持〕にとっては、人口が、資本の強制された蓄積によって、土地からの資本に対する報酬が極めて僅かになるまで増進させられないことが絶対に必要である。……社会的交際 (social intercourse) と、労働の生産物を増大させるあの諸力の結合との双方にとって、好都合な一定の人口密度がある。しかし、これらの便益が獲得されたならば、人口が一層増進することを願う理由はほとんど存在しないように思われる。」(Mill [13] pp. 64-65, 訳56-57頁)

社会的交際と高い生産力を生み出す結合労働 (combined labour) を確保するための最適人口以上に人口を増大させることは、食料生産の困難性を拡大させ、人類を究極的には「食料を生産しそれを消費するというたった二

つの機能しかもたない、極めて低級の動物の群」(Mill [9] p.11)にしてしま  
う。「知識の領域を増大させ、人間の諸能力と享樂を増加させうる能力」の  
ある「余暇をもった階級」の存在に文明社会は依存しているのであるから、  
このような中間階級の存立基盤それ自体を脅かす人口増大は、まさに  
文明の基盤それ自体を崩壊されるものと捉えられていたのである。それゆ  
え、労働者が「功利の原理をしっかりと心に留め」、富者のパターナリズム  
による「養育(nursery)の迷信」を捨て去ることが、ミルにとっては文明の  
維持にとって不可欠なことであった(Mill [9] pp.11-13)。

それゆえ、次の引用が示すように、中間階級の存在をなによりも重視す  
るジェイムズ・ミルにとって、人口制限によって停止状態に入ることはな  
ら忌避されるべきこととは考えられていないのである。しかもそれどこ  
ろか、なるほどジョン・ステュアート・ミルのように明確な提言には至っ  
ていないとはいえ、停止状態に対して積極的な姿勢すら読みとることがで  
きるのである。

「出産数の制限は、もしその目的を達成することが可能であれば、労働者  
の境遇を望まれる快適で楽しい状態に引き上げるばかりではなく、資本の  
蓄積を完全に阻止する(prevent entirely the accumulation of capital)まで押し  
進められうるのである。」(Mill [13] p. 67, 訳59頁)

以上から、ジェイムズ・ミルが、けっして経済発展を進歩と同一視する  
「古い学派の政治経済学者」の立場に立っていたのでないことは明らかで  
あろう。「欲望の誘惑を抑制する力」を獲得し「趣味の快樂、知性の行使の  
快樂、徳性の快樂」を「陶冶」することを幸福にとって「より価値あるも  
の」と考えるたぐいの功利主義者ジェイムズにとって、なによりも重要で  
あったのは、余暇を知的道徳的陶冶に捧げる多数の中間階級を維持するこ  
とであった。分配の自然法則の作用と人口制限は次の引用が示すようにそ

のための不可欠な条件であったのである。

「資本に対する土地からの収穫がまだ高い間にこのこと〔人口制限〕が成し遂げられるならば、労働者の報酬は豊かであろうし、大きな余剰がなお残るであろう。分配の自然法則が自由に作用することが許されるならば、この純生産物のより大きな部分は、労働の必要から免れ、幸福を享受するとともに最高の知的道徳的資質を獲得するのに最も有利な環境におかれていた多数の人々からなる階級の手に、中庸な量ずつ (in moderate portions) 渡るであろう。」(Mill [13] pp. 65-66, 訳57頁)

#### Ⅳ-2 模範原理と中間階級による労働階級の指導

それでは、もう一つの条件、すなわち労働者が「その精神を陶冶する機会が与えられる環境」におかれることは何故必要なのであろうか。またいかなる条件がそれを保障すると考えられているのであろうか。

ミルは、1826年に公表された「国民の状態」においても、「今日特徴的なことは、労働諸階級の状態が改善に向かつてはいないということである」(Mill [15] p. 263) との認識を示している。「食物の欠乏と過剰な労働の状態は、大多数の人間が陥っている状態である」(Mill [11] p. 30, 訳77-78頁)が、食物と労働は「観念の習慣的に確実なつながりを持ち込み、したがって、精神に永続的な傾向を刻み込む力をもっている」物質的諸事情の中でも主要な事情である。食物の欠乏と過剰な労働はともに人間精神の道徳的部分と知的な部分の両方に有害な影響を及ぼす。すなわち、それらはともに他者に対する共感を喪失させ憎悪を抱かせ、「残忍さと不節制とを吹き込み、観念の受容を不可能にし、精神の諸器官を麻痺させる」。それゆえ、「大多数の人間の肉体労働がある一定の程度を超えて拡大されれば、知性も徳性も幸福も地上で栄えることはできない」ことになる (Mill [13] p. 30, 訳77頁)。

しかし、同時に文明社会の物質的基礎と文明を進歩させる主体である中間階級を維持するためには、多くの労働者が肉体労働に携わらざるをえないことはミルにとって必然的なことであった。したがって、一方で可能なかぎり最大の労働生産物を確保すると同時に、他方で乏しい食料を得るための過剰な労働を回避するということが「最高度に重要な問題」と位置づけられるのである (Mill [13] p. 30, 訳77頁)<sup>7)</sup>。

過剰な労働を強いる「過度の貧困」はミルによれば貴族的統治構造に起因する。それは、労働者に「賃金率を決定する法則」をはじめとした知識が普及するのを阻止し、富者のパターナリズムによる「養育 (nursery) の迷信」を吹き込むことで労働者の状態を無知で過度の貧困状態に縛りつけている。「分配の自然法則」の作用の下での人口制限は、食料の欠乏と過剰な労働を回避するとともに文明の物質的および精神的基礎を確保する「貴重な中間点 (precious middle point)」を達成することを可能にするのである<sup>8)</sup>。

---

7) 余暇を享受する中間階級を物質的に支えるべき労働階級が文明社会には不可欠な存在であるという認識をもっていたミルにとって、労働者が「依然として額に汗してパンを稼ぐことが必要である」ほど貧困であることはなんら否定されていないどころか、必要なことであつたのである。彼が批判したのは、文明社会の崩壊をまねきうる「過度の貧困 (extreme poverty) の状態」に労働者が陥っている事態であつた。労働者に「生存と享楽に必要なもの」が充分に与えられることは望ましいとされているし、「絶え間ない労苦に縛りつけられる」ことはあってはならないと考えられてもいるが、それでも労働する必要に縛りつけられているという意味での貧困状態にあることが中間階級の余暇を確保する上で、したがって文明を維持する上で当然のことであつたのである。この点についてマルクスは「ミルは資本と労働との対立をもみ消してはいない」として、直接労働に携わらない諸階級が人間的な能力を自由に発展させるために「労働者大衆が自分自身の時間の主人なのではなく自分自身の欲望の奴隷」でなければならないことを、すなわち階級対立をミルは「必然的な法則」として表現していると指摘している (Marx [5] S. 93, 121頁)。

この点に関連して、ミルは「過度の貧困」状態は教育に対する障害としているが (Mill [8] p. 337), 「さほど厳しくない貧困の状態 (the more moderate cases of poverty)」においてはかなりの程度で正しい教育が可能であることをことさら強調している。例えば、ミルは親子の愛情 (親子の間の快適な観念の連想) の形成にとって好ましくない状態として「極貧と巨富」を指摘し、「さほど厳しくない貧困」の場合には「親の愛情はかなりの程度で存在する」と判断している (Mill [16] II, pp. 222-23)。

それゆえ、劣悪な統治が消滅すれば過度の貧困と過重な労働は解消されるはずであるが、しかし、それでも労働者は労働に従事するというだけで知的・道徳的陶冶において不利な状態に留まらざるをえないとミルは断定する。というのは、「知識の獲得にあてがわれる時間は労働から離れているときだけ」だからである (Mill [11] p. 39, 訳96-97頁)。ミルにあっては肉体労働は知性形成において何ら積極的な意義を与えられていないのである。

なるほどミルは幸福に資する資質として知性のほか、節制、正義、寛大をあげているが、ミルにとって何よりも重要な資質は知性であり、他の資

- 
- 8) ミルは、「国教会とその改革」において国教会に対する抜本的な改革を提案している。そして、教義と儀式を排除した改革された国教会の活動の一つとして日曜集会での教区民に対する自然諸科学や社会諸科学の教育を推薦している。そこで、ミルは、「賃金率を決定する諸法則」を学習させることが、「分配の不平等に彼等を甘んじさせるあらゆる方法のなかで最善の方法である」と指摘している。これは「彼等の労働によってこそあらゆるものが生み出されるが故に、その不平等はすべて彼等の権利の侵害であると彼等に語るほど無知な、あるいは悪意のある」社会主義者に対抗する意図であったが、ミルはこのような教育が与えられれば、人口制限が促進され「過度の貧困」から労働者を脱出させることができ、「分配の自然法則」とそこから帰結する不平等を甘受させることができると確信していたのである (Mill [18] p. 291)。

なお、ジェイムズのこの論文は、教区民に共通の快樂への参加を習慣づけることによって、「優しさ、寛大さ、そして他者の喜びに喜びを感じ他者の悲しみに悲しみを感ずる」性格を形成するための様々な「社交的な娯楽」(Mill [18] pp. 292-93) やアガペーないし親睦の食事 (friendship-meals) としての性格をもたせた共同食事が提案されており、彼が快苦原理を通じてどのような仕方で利他的な性格を形成させようとしていたのか知る上で興味深い論文である。ところでこの論文について、山下 [41] は「この論文の重点は、国家権力と癒着して特権を恣にしていた当時の国教会を痛烈に批判した前半の部分にあり、ユートピア的改革案を論じた後半は、むしろ皮肉なパロディであって、彼の本音は、国教会の全面的な非国教化の主張にあった」と強調されており (120-22頁)。しかし、「哲学的急進主義は……知的公共機関 (intellectual establishment) の理論に対する全面的な反対とはほど遠い」のであって、「実際そのような理論の出発点を提供しえた」ジョン・ステュアート・ミルの「公共財団と教会財産」およびその2年後に公開されたジェイムズのこの論文での国教会改革案はこの証左であるとの主張 (Knights [4] pp. 157-58) も十分説得力をもちうるのである。なお、Fenn [3] は、これらの提案をミルが「ギリシア哲学の理想に染まっている思想家」であることの証左としている (pp. 93-94)。

質の陶冶はこの知性の陶冶に大いに依存している。ミルにとって「善き実践は、いかなる場合にも、正しい理論 (sound theory) 以外にいかなる堅実な基礎ももちえない」のであり、理論とは「善き実践的規則を引き出すことが最も容易である秩序と形式とに並べられている、我々がもっている知識の全体」(Mill [11] p.5, 訳19頁) のことであり、それはまさに我々の知性の構成要素なのである (Mill [11] p.15, 訳43頁)。それゆえ、ミルは、明証にもとづく意見の形成と徳性との関係を次のように述べている。

「あらゆる種類の徳性は、この土壌 [明証にもとづく意見の形成] から容易に芽を出すのであり、他の土壌では植えつけられない。……証拠に対する配慮は、人類の善悪に対する配慮を必然的に伴うのである。」(Mill [14] p.15)

したがって労働者は幸福に資する資質を陶冶する上で不利な状態におかれているのであり、それゆえ「生活資料を稼ぐためにその労苦と配慮を注がなければならない人々……で構成されている社会は、粗野であろうし、ますます粗野になる傾向をもっている」ことになる。しかし、ミルによれば「労働階級は彼等の上位の環境におかれた人々を模倣する存在になる」(Mill [19] p.285) のであり、それを通じて彼等は「精神を陶冶する機会を与え」られうるのである。

すでに指摘したように、ミルによれば、人間の性格はその人の抱く習慣化された観念の連鎖によって決定され、教育とはこの「習慣を形成するための配慮」(Mill [11] p.31, 訳81頁) であった。ところで、この観念の連鎖の源泉は、我々自身に与えられる印象と他者から模倣する連鎖との二つであるが (Mill [11] pp.36-37, 訳91頁)、労働者の「精神を陶冶する機会」との関係でとりわけ重視されるのが後者の「模倣の原理 (the principle of imitation)」である。すなわち、「我々を取り囲むすべての諸個人の精神の中

を最も習慣的によぎる「観念の」つながり」が我々自身の精神の中で習慣的となり「我々自身の印象から生じるつながりと同様に、我々に対して同じ影響力を及ぼす」(Mill [11] p. 44, 訳107-08頁) ことになるというものである。この模倣原理は、「我々を取り囲む」人々の称賛と非難から引き出される快楽と苦痛の回避を通じて強力に作用する。

「我々の周囲にいる人々から好意的に見られることを最も強力で提示する思考のつながりや行動の方向がいかなるものであれ、我々はこれらを陶冶し示したいという最も強力な動機を感じる。反対に、我々を彼等の悪しき評価にさらす思考のつながりや行動の方向がいかなるものであれ、これらを避けたいとする最も強力な動機を感じる。これらの誘因は、我々に不断に作用しているので、習慣を生み出す上で、さらに我々が活躍している社会に適合した性格に我々を鑄造するうえで、すなわち我々を教育する上で、抗し難い影響力をもっているのである。」(Mill [11] p. 44, 訳109頁)

こうして、「社会が「喜んで名誉を与える (delighteth to honour)」性格を獲得することが社会を構成する人々の主要な目的とならざるをえない」(Mill [11] pp. 44-45, 訳109-10頁) ことになる。中間階級の間で「趣味の快楽、知性の行使の快楽、徳性の快楽」を「陶冶する」ことが名誉と結びついており、そして彼等が労働階級を「取り囲む」ならば、模倣原理を通じて労働階級の間にもそれらの快楽を陶冶することが広まると考えられたのである。つまりミルは知的道徳的徳性と名誉との連想が、貴族的統治構造の下での富と名誉との強力な連想に取って代わることによって、そのモラル・サンクションを通じて労働者とその「精神を陶冶する」ことを期待したのである。その確信は次の引用に端的に表現されている。

「民衆のうち中間階級の下にいる部分の意見を形成し、彼等の精神を指導

するのは、つぎのような知性があり徳性のある階級である。つまり、彼等と最も直接に接し、彼等と親密な交流をする不断の習慣 (constant habit of intimate communication with them) をもち、数多くの困難すべてにおいて彼等が助言と援助を求めて飛びつき、健康な時も病気の時も、幼年時においても老年においても、直接にかつ日々信頼を感じており、彼等の子供達は模倣すべき模範 (models for their imitation) として見上げ、その意見が繰り返されるのを彼等が日々聞き、その意見を採用するのが彼等の名誉 (honour) と考えられているような人々である。……彼等の下にいる人民のうちの圧倒的の大多数は確実に、彼等の助言と模範 (advice and example) によって指導されるであろう。」(Mill [12] p. 32, 訳181-82頁)

このように、模倣原理の作用によって労働階級は中間階級に結びつけられることになり、その「精神を陶冶する」ことを学ぶのである (Mill [19] p. 285 も参照)。そのためには、中間階級が「指導的な階級——社会の残りの人々から分離されているのではなく、親密に交際している階級——」(Mill [19] p. 291) でなければならない。

それゆえ、ミルは、「工業地域、人口がほとんどすべて富裕な製造業者と貧しい労働者から構成されているために中間階級が極端に少ないとりわけ不幸な地域」においては、「労働者達の精神に対して誰も努力を払おうとせず、彼等の難儀に共感してくれる中間階級の徳のある家族はおらず、彼等の子供達が見て誉め称えることのできるような家族の模範は存在しない」(Mill [12] p. 32, 訳182頁) がゆえに、労働者の知的道徳的な資質は改善されることはないと判断したのである。このような工業地域で「暴徒の無秩序」が生じるのはまさに労働階級と彼等を取り囲むべき中間階級との親密な関係の不在に起因するものであった。ミルにとって富裕な製造業者はこのような中間階級として認められていない。それゆえ「工業地域」はミルにとって将来のありうべき姿ではなく、むしろ忌避されるべき姿であった

のである<sup>9)</sup>。

それでは、以上の検討してきたジェイムズ・ミルの将来社会像はどのよう  
にジョン・ステュアート・ミルの停止状態論に継承されているであろう  
か。

## V まとめにかえて——ジョン・ステュアート・ミルの停止状態 論の想源——

ジョン・ステュアート・ミルの停止状態論は、イギリスやアメリカを典  
型とする「現代産業社会 (modern industrial communities)」における生のあり  
方に対する根本的な批判に立脚して展開されている。ジョンにとって、経  
済発展と進歩を等置する「古い学派の政治経済学者」が自明の前提として  
いる、利己的な富の追求に捧げられている生は「人間の正常な状態」では  
ない (Mill, S. [24] p. 754, 訳(4)105頁)<sup>10)</sup>。

- 9) 余暇を通じて高度な知的徳的資質を陶冶する多数の「中庸な財産」所有者  
と「全ての実質的な享楽手段を所有している」労働階級から構成された社会  
というミルのヴィジョンは、産業資本主義というよりもむしろアリストテ  
レスの「最善の国制」を想起させるのに十分である (Aristotle [1] pp.96-98, 訳  
202-05頁)。過度の富と過度の貧困が存在しないためにそれらがもたらす弊  
害が回避される多数の中庸な財産所有者で構成される社会というアリスト  
テレス的な理想の実現と維持を、ジェイムズ・ミルは、人口制限を伴った「蓄  
積の自然法則」の展開の中に見出しているのである。そこでは、人口制限と  
市場における等価物どうしの交換が、むしろ最善の国制を維持するための富  
の適正な分配を保障するのであり、中間階級と労働階級との親密な関係が  
「趣味の快楽、知性の行使の快楽、徳性の快楽」を陶冶する風潮を支配的に  
すると考えられたのである。
- 10) ジョンによれば、イギリスの政治経済学者は、「大ブリテンと合衆国にとつ  
てのみうまく適合する「人間本性の経験諸法則」と「激しい競争 (intensity of  
competition)」を暗黙に想定しているために、「金儲けの欲求を直接の目的と  
する活動においてさえ、見たところでは小さな動機がいかに頻りに金儲けの  
欲求を凌ぐことがあるか」知りえないのである (Mill, S. [23] p. 906, 訳(6)131  
頁)。ジョンにとって、これは「抽象的ないし仮説的科学」としての政治経済  
学の結論が「どのようにエソロジーの考察によって影響を被るか」につい  
ての考察の欠落によって生じている問題であった (Mill, S. [24] p. 239, 訳(2)90  
-91頁も参照)。

ところで、ジョンによれば、このような考察が「等閑にされていても、抽象  
的ないし仮説的科学としての独立した科学の欠陥ではないが、包括的な社会

ところで、ジョン・ミルによれば、このような「富を求める奮闘」は、「富が力であり、できるかぎり富裕になるということが野心の普遍的な対象」となっていることによって生じている。富裕であることが名誉の源泉であれば、消費もまた富の誇示を目的とした形態をとることになる。このような富の追求と「富の象徴 (representative of wealth) 以外にはほとんどあるいは全く快楽を与えない消費手段を倍増させる」という誇示的な消費に対してミルは極めて批判的であった (Mill, S. [24] pp. 754-55, 訳(4)106頁)。

「この国の中間階級の墮落した道徳の状態の主要な原因のあるものは、彼等が不必要で無駄な支出を可能な限り大げさに誇示しようと夢中になっていることにある」 (Mill, S. [28] p. 93)

しかも留意すべきことは、イギリスにおいてはその政治制度がこのような「富を獲得しようとする欲求に極めて直接的で有効な刺激を与えている」ことをジョンが強調していることである。ジョンによれば、イギリスにおいては封建制度が比較的早く衰退したことによってトレードに対する不当な差別が軽微となったために、富を権力の唯一の源泉とする貴族的統治構造が生じたのである。

---

科学の諸部門としての実践的適用 (practical application) においてはそれらの独立した科学の質を損ねてしまう」のである (Mill, S. [23] p. 906, 訳(6)131頁)。『経済学原理 (*Principles of Political Economy with Some of Their Application to Social Philosophy*)』の目的は、まさに「抽象的ないし仮説的科学」としての政治経済学の諸原理を明らかにするだけでなく、それとともにそれらの諸原理が「どのようにエソロジーの考察によって影響を被るか」について考察を加えることで、それら諸原理の若干の「実践的適用」を行うことにあったのである (この点については『自伝』における『原理』の成功についてのミル自身の叙述も参照されたい (Mill, S. [26] pp. 243-45, 訳 205-06頁))。したがって、ジョンの『原理』が政治経済学の方法、すなわち『論理学体系』における直接的演繹法だけで構築されていないことは当然なのである。

「富を政治的影響力の真の源泉とする政体が生じたので、富の獲得は、その固有の効用とは別に、人為的な価値を付与された。富は力と同義語になった。……富は個人が考慮すべき重要な事柄の主要な源泉となったのであり、人生における成功を計る尺度とするしとなったのである。ある社会的地位から抜け出しさらに一段上の地位に上ることはイギリスの中間階級の生の大きな目的なのであり……個人が考慮すべき重要な事柄と富のしるし (signs of wealth) との間の連想は極めて強力であるので……支出が大きいたく見せかけようとする愚かな欲求が、一つの情念になっているのである。」(Mill, S. [24] pp. 171-72, 訳(1)324-25頁)

このように、ジョンの停止状態論の背景には、ジェイムズと同様に、イギリスの貴族の統治構造によって強められた富と名誉との結びつきへの批判があったのである (Mill, S. [26] pp. 177-79, 訳152-53頁も参照)。

なるほど、「富を求める奮闘」によって活力が保たれていることは「活力が錆び付き淀むよりも望ましい」と彼は考える。しかし、ジョンにとってそれは「優れた人々が他者をより優れたものに教育することに成功するまで」の「精神が粗野であるあいだに必要な刺激」にすぎないのである<sup>11)</sup>。彼が経済的な先進諸国が進んで「資本と富の停止状態」に入ることを切望したのは、人々の活力が「富を求める奮闘」から知的道徳的陶冶に向けられると考えたからであった。

「高給で豊かな労働者層が存在するとともに、一生涯の間に稼ぎ蓄積した

---

11) もちろん「社会の再生のための計画は、平均的な人間を考慮しなければならないし、彼等だけではなく、人格的および社会的諸徳性の点ではるかに平均以下の残りの人々をも、考慮しなければならない」(Mill, S. [27] p. 744, 訳431-32頁)と考えるリアリスト、ジョンにおいては、「人類の怠惰な本性 (the natural indolence of mankind)」が深刻に受けとめられており、活力を失わせるため「競争は考えられうるかぎり最良の刺激ではないかもしれないが、現在においては必要な刺激」(Mill, S. [24] p. 795, 訳(4)196-97頁)であるとの現実認識があることは留意すべきである。

ものを除けばいかなる過度の財産 (enormous fortunes) も存在しないが、しかし現在よりもより多くの人々が、劣悪な労苦を免れるばかりではなく、機械的な煩雑さから肉体的にも精神的にも解放され、気品ある生 (the graces of life) を自由に陶冶し、その成長に不利な環境にある諸階級に気品ある生の模範 (examples) をあたえることができるほど十分な余暇 (leisure) をもつことになるであろう。このような社会状態は……停止状態と最も自然に結びつくであろう。」(Mill, S. [24] p. 755, 訳(4)107-08頁)

それではこのような状態に移行する主要な条件は何か。ジョンによれば、それは、「個人の慎慮と節儉、および……自らの勤労の成果に対する個人の正当な請求権と一致する限りで財産の平等を促進する立法の体系」の結合した効果によって達成される「より良き分配」である (Mill, S. [24] p. 755, 訳(4)106-07頁)。「財産の平等を促進する立法の体系」ということで考えられているのは、「遺贈や相続によって獲得しうる金額を中庸な独立 (moderate independence) をなすのに十分な量に制限する」ような相続法の改革である。また「個人の慎慮と節儉」の中心をなすのは、人口制限を可能にする自制能力の陶冶である。ジョンにとっても、「厳格な人口制限」は貧困の解消にとってばかりではなく、知的道徳的陶冶にとっても不可欠な条件と考えられていることに留意すべきであろう。

彼によれば、イギリスはすでに「人類が協業 (cooperation) と社会的交際の両者から生ずる利益のすべてを最大限獲得しうるために必要な人口の密度」(Mill, S. [24] p. 756, 訳(4)108-09頁) を達成している。したがって、ジェームズと同様に、それ以上の人口増加は、徒に劣等地耕作を進展させ利潤率を低下されることによって、「気品ある生を自由に陶冶」するための余暇を喪失させると判断したのである。劣等地耕作の進行によって強いられて停止状態に入るよりも人口制限によって進んで停止状態に入るべきとの彼の主張には、陶冶のための余暇を確保するという父と同様の目的があった

のである<sup>12)</sup>。

さらに留意したいのは停止状態における階級構成である。上の引用から明らかのように、ジェイムズと同様にジョンにおいても、相続による「過度の財産」が存在せず、余暇を知的道徳的陶冶に捧げる多数の中間階級が不利な環境にある諸階級に模範を示す社会が展望されている<sup>13)</sup>。

ジョンが停止状態において「自然の諸力から獲得した戦利品は、人類の共通の財産になるのであり、万人の運命を改善し高める手段となる」(Mill, S. [24] p. 757, 訳(4)110頁)というとき、それは「戦利品」である富が生目的であることを止めて人々の知的道徳的陶冶の物質的な手段になることを意味している。これは彼の功利主義から当然帰結するものであった。「動物的欲望 (animal appetites)」の快楽ではなく「高度な諸能力」の行使による高級な快楽の増大を強調するジョンの「功利主義は、性格の高貴さの一般的陶冶 (general cultivation of nobleness of character) によってのみその目的を達成しうる」(Mill, S. [25] pp. 213-4, 訳126頁)からである。そして、このようなジョンの功利主義と、「趣味の快楽, 知性の行使の快楽, 徳性の快楽は、適切に陶冶されるならば、欲望 (appetite) の誘惑を抑制する力を獲得するのであり、全ての感覚が直接に与えることができるよりも幸福のより価値ある要素として重んじられる」と主張するジェイムズの功利主義との距離は、従来考えられたよりもはるかに小さいといえるであろう。

以上、ジョン・ステュアート・ミルの停止状態論を検討してきたが、も

- 
- 12) 停止状態に入るべきとした理由として孤独の必要性和自然美の保護をあげている点は、ジェイムズにはないジョンの独自な点である。しかしもちろん、孤独は「瞑想ないし性格を深めるために不可欠」であり、自然の耕地化は「思索と大望の揺籃」である「自然の美しさと雄大さの前での孤独」(Mill, S. [24] p. 756, 訳(4)108-09頁)を消滅させるとの理由は、それらの必要性が陶冶との関係で主張されていることを示しているのであり、その点ではジェイムズとの連続性も忘れてはならないであろう。
  - 13) しかし雇用関係の廃棄の社会的傾向を読みとったジョンは、ジェイムズのように肉体労働に従事する階級とそうでない階級との区別を必然的とは見ていないことは留意すべきであろう。

はやその中にジェイムズ・ミルの思想がいかに色濃く投影されているか改めて指摘するまでもないであろう。

しかし、留意しなければならないのは、ジョンにおいては、ジェイムズと違って、イギリスの貴族的な統治構造が富の追求を人々の生における主要な目的にしていると認識されただけではなかったということである。それは、「激しい競争 (an intensity of competition)」の存在する「現代産業社会」それ自体に深く根ざした生のあり方としても認識されたのである。

「アメリカの北部と中部の諸州は、白色人種でかつ男性に属する人々に影響を及ぼしている全ての社会的不正と不平等を外観上取り除いており、他方、人口の土地と資本に対する割合は、健全な肉体をもち、かつ不節制によってそれを失ってしまわない全ての社会成員に富裕さを保障するほどであるので、極めて好都合な環境にあるこの段階の文明の一つの実例である。彼等は、チャーティズムの6箇条を実現しており、しかも貧困というものがない。にもかかわらず、これらの利点が彼等のためになしたのはたんに、ただ一方の性に属する全ての人々の生がドル稼ぎに捧げられ、他方の性に属する人々の生が、ドル稼ぎを養育することに捧げられることだけなのである。」(Mill, S. [24] p. 754, 訳(4)110頁)

過度の財産と貴族的統治構造が存在せず多数の中間階級で構成された社会にもかかわらず「ドル稼ぎ」に捧げられる生が蔓延する現実には、ジェイムズの求めた陶冶が彼の展望した社会の実現によっては達成されえないことを示していた。ジョン・ステュアート・ミルがより積極的に停止状態論を展開した背景には、まさに過度の貧困と過度の富裕の間に位置する「中間的な地位を占める人々」を増大させる「商業文明」(Mill, S. [22] p. 192, 訳79頁) 自体が知的道徳的腐敗を生み出すというジェイムズ・ミルにはなかった新たな認識があったのである<sup>14)</sup>。

[注記]

- 1) James Mill と J. S. Mill の出典表記は、それぞれ Mill [ ], Mill, S. [ ] によって区別した。
- 2) 訳文は必ずしも邦訳書通りではない。なお傍点はすべて引用者による。

[参 考 文 献]

- [1] Aristotle, *The Politics*, ed. by S. Everson, Cambridge, 1988, 山本光雄訳『政治学』岩波文庫, 1961年。
- [2] Bain, A., *James Mill: A Biography*, 1882; rept. New York, 1967.
- [3] Fenn, R. A., *James Mill's Political Thought*, New York & London, 1987.
- [4] Knights, B., *The Idea of the Clerisy in the Nineteenth Century*, Cambridge, 1978.
- [5] Marx, K., *Theorien über den Mehrwert, Marx-Engels Werke*, Bd. 26-III, Berlin, 1968, マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『剰余価値学説史第3分冊』大月書店, 1974年。
- [6] McCulloch, J. R., *The Literature of Political Economy: A Classified Catalogue of Select Publications in the Different Departments of That Science with Historical, Critical, and Biographical Notices*, 1845; rept. New York, 1964.
- [7] Mill, J., "Chas, *Sur la Souveraineté*," *Edinburgh Review*, XVII, 34 (Feb., 1811), pp. 409-428.
- [8] Mill, J., "Report on the State of Mendicity in the Metropolis," *The Philanthropist*, vol. V, no. 20, (1815), pp. 314-340.
- [9] Mill, J., "Colonies," (Feb. 1818): in [20].
- [10] Mill, J., "Economists," (Jan. 1819), in *Supplement to the IV, V, and VI Edition of the Encyclopaedia Britannica*, vol. III-2, 1824, pp. 708-724.
- [11] Mill, J., "Education," (Dec. 1819): in [20] 小川晃一訳『教育論・政府論』岩波文庫, 1983年。
- [12] Mill, J., "Government," (Sept. 1820): in [20] 小川晃一訳『教育論・政府論』岩波文庫, 1983年。
- [13] Mill, J., *Elements of Political Economy*, 1821, 3rd. ed. 1826: in [21] 渡邊輝雄訳『経済学綱要』春秋社, 1948年。

- 
- 14) このようなイギリスとアメリカに共通する「激しい競争」の存在する商業社会に対する新たな認識は、深貝 [40] が指摘されているように、1836年以降ミルの中で自覚されるに至った。

- [14] Mill, J., "Formation of Opinions," *Westminster Review*, VI, 11 (Jul. 1826), pp. 1-23.
- [15] Mill, J., "State of the Nation," *Westminster Review*, VI, 12 (Oct. 1826), pp. 249-78.
- [16] Mill, J., *Analysis of The Phenomena of the Human Mind*, 2vols. 1828 ; 2 vols. 1869 ; rept. New York, 1967.
- [17] Mill, J., *A Fragment on Mackintosh*, London, 1835 : in [21].
- [18] Mill, J., "The Church, and its Reform," *London Review*, I, 2 (Jul. 1835), pp. 257-95.
- [19] Mill, J., "Aristocracy," *London Review*, II, 4 (Jan. 1836), pp. 283-306.
- [20] Mill, J., *Essays reprinted from the Supplement to the Encyclopaedia Britannica*, 1828 : in [21].
- [21] Mill, J., *The Collected Works of James Mill*, 7 Vols, London, 1992.
- [22] Mill, J. S., "De Tocqueville on Democracy in America [II]," 1840 : in [29] vol. XVIII. 山下重一訳『アメリカの民主主義』未来社, 1962年.
- [23] Mill, J. S., *A System of Logic Ratiocinative and Inductive ; Being a Connected View of the Principles of Evidence and the Methods of Scientific Investigation*, 1st ed. 1843 ; 8th ed. 1872 : in [29] vol. VII-VIII. 大関将一訳『論理学大系』(全6冊)春秋社, 1949-59年.
- [24] Mill, J. S., *Principles of Political Economy with Some of their Applications to Social Philosophy*, 1st ed. 1848 ; 7th ed. 1871 : in [29] vol. II-III. 末永茂喜訳『経済学原理』(全5冊)岩波文庫, 1959-63年.
- [25] Mill, J. S., *Utilitarianism*, 1861 : in [29] vol. X. 水田珠枝・永井義雄訳「功利主義」『世界の大思想 ミル』河出書房所収, 1967年.
- [26] Mill, J. S., *Autobiography*, 1873 : in [29] vol. I. 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫, 1960年.
- [27] Mill, J. S., *Chapters on Socialism*, 1879 : in [29] vol. V. 永井義雄・水田洋訳「社会主義論集」『世界の大思想 ミル』河出書房所収, 1967年.
- [28] Mill, J. S., *The Later Letters of John Stuart Mill 1849-1873* : in [29] vol. XIV-XVII.
- [29] Mill, J. S., *Collected Works of John Stuart Mill*, ed. by F. E. L. Priestley, J. M. Robson and others, 33 vols. Toronto, 1963-1991.
- [30] Smith, A., *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* : in [31] 大河内一男監訳『国富論』I~III 中公文庫, 1978年.
- [31] Smith, A., *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of*

- Adam Smith*, ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford, 1976.
- [32] Thomas, W., *The Philosophic Radicals: Nine Studies in Theory and Practice 1817-1841*, Oxford, 1979.
- [33] Thomas, W., Mill, Oxford, 1985. 安川隆司・杉山忠平訳『J. S. ミル』雄松堂出版, 1987年.
- [34] Winch, D. N., “James Mill and David Ricardo,” in D. N. Winch ed. *James Mill; Selected Economic Writings*, Edinburgh, 1966.
- [35] Winch, D. N., “The cause of good government: Philosophic Whigs versus Philosophic Radicals,” in S. Collini, D. Winch & J. Burrow *That Noble Science of Politics: A study in nineteenth-century intellectual history*, Cambridge, 1983.
- [36] 千賀重義「哲学的急進主義とリカードウ」平田清明編著『社会思想史』青林書院新社所収, 1979年.
- [37] 立川 潔「「過渡期」の J.S. ミル——商業社会における道徳的腐敗と実践的折衷主義——」『北海学園大学経済論集』第38巻第3号, 1991年.
- [38] 立川 潔「ジェイムズ・ミルにおける中間階級と議会改革——余暇と陶冶——」『成城大学経済研究』第133号, 1996年.
- [39] 永井義雄「功利主義」田村秀夫・田中浩編『社会思想辞典』中央大学出版部所収, 1982年.
- [40] 深貝保則「J. S. ミルの〈多数の専制〉考(1)——トクヴィルとの関係で——」『商経論叢』(神奈川大学)第29巻第4号, 1994年.
- [41] 山下重一「晩年のジェイムズ・ミル(下)」『國學院法学』第31巻第3号, 1994年.

[付記] 本稿は平成8年度成城大学教員特別研究助成による研究成果の一部である。